

## 黛敏郎の「カンパノロジー・エフェクト」における音列技法 清水慶彦

黛敏郎（1929-1997）の作品では、クラスターにちかい不協和なものもふくむ広義での和音を集積することで得られる「響き」が重要な要素として用いられることが少なくない。代表作のひとつである《涅槃交響曲》（1958）で導入した「カンパノロジー・エフェクト」も、梵鐘の音のスペクトル分析をもとにしたとされる複数の和音を反復的に使用することで、音の集積としての「響き」の交錯を得る音響技法の一種であるといえる。

黛の作品のうち、とくに1950年代中頃から1960年ごろの作品を分析してみると、そのような「響き」の形成手法として音列技法が用いられていることがわかる。本稿では、音列を垂直方向に堆積することで「響き」を形成する手法を音列の「堆積的用法」とよび、黛の作品において重要な役割をはたす手法であると位置づける。そのうえで、音列の「グループ化」や音列の堆積的用法によるオスティナートなど、この手法がとられる際にみられる特徴的傾向を考察する。

くわえて、これまで梵鐘の音の音響分析にもとづくものであるという点が強調されてきた「カンパノロジー・エフェクト」に用いられている和音が、音列を「グループ化」して堆積することで形成されたものであると解釈することが可能であるということを提起する。音列技法が点描的なポスト・ウェーベルン様式と結びつけられて用いられることが多かった当時、「響き」の形成手法としての音列技法という黛のアプローチは独自のものといえるだろう。